最優秀賞
— 環境大臣賞 —

福島という新境地

学校法人灘育英会 灘高等学校3年 岩井（イワイ） 響（ヒビキ）

学校主催の福島合宿があった。毎年恒例となっているこの行事、興味はあったのだが毎年参加しておらず、高校最後の年、高3 になってやっと重い腰を上げた。今の福島を支えている方にお話しを伺い、参加者で議論するというプログラムが組まれていた。無論出発前、入念な下調べと当時のかすかな記憶を頼りに拙いながらも福島像をつくりあげた。東日本大震災。記憶にあるのは、テレビ画面に映画さながらの非現実が広がっていたこと。裁判記録等を読んだが、当事者意識がそこにあがる資料に現れるはずもなく、その反動からか、期待と、福島という未知の土地への好奇心を胸に合宿が始まった。

曰く、10 年経ったらしい。しかし、圧倒的な存在感を伴って姿を現したのは、バスでの移動中に見た、バリケードと、当時の姿かたちのまま残されている半壊した家であった。頭をよぎったのは、阪神淡路大震災。大都会で起きたその地震は、当時の写真を見るに、復興ははやかったらしい。だが皮肉にも、目の前の光景はそれと全く対照的であった。放射能汚染の問題があるとはいえ、どうやら都会と田舎の差は東京一極集中の文脈で語られる時に感じるもの以上らしい。また、復興に携わっている方や、当時電力会社で働いていた方にもお話を伺った。滲み出るような反省の意と、絶え間ない努力のお話だった。

議論をし、合宿を終えた僕には、残念ではあるが福島の未来への希望のようなものはあまり残らなかった。もちろん福島で出会ったすべての要素がそうであったわけではないが、一般に見聞きするのは、地震、そして原発事故という負の遺産の払拭とそれを後世に伝え残すという趣旨。福島には現代社会の抱える問題がいくつも転がっている。震災関係はもちろんそうであるし、その他にも、進行する高齢化に戻ってこない若者たち、補助金問題もある。こんな事業やあんな事業で復興を成し遂げる、と強い決意のもと精力的に活動されている方もいるが、やはり現実は残酷であるように思う。処理水をめぐる世論を見ても、世間の目は依然として厳しい。福島は、原発事故の場所というレッテルが貼られたまま、歴史に埋もれてしまうのだろうか。

しかし僕が思うに、視点さえ変えれば福島は最先端の場所になりうる。人類がこれまで蓄積してきたその叡智の結晶の一つである原子力という技術。そして福島の事件を中心に発達する汚染物質の除去技術。このような知識、技術を進行形で扱い、進化させている場所はそう多くないはずだ。顕在化した高齢化。その対応は必ず、日本がそう遠くない未来迎えるであろう問題の解決への糸口になるはずだ。福島の全てが前代未聞である。ともすれば世界の諸問題のスタンダードを築きかねない。こう考えたとき、福島は歴史に埋没する被災地から一転、新境地となる。

福島も悪いことばかりではない。また、勧善懲悪で片付くほどにこの世界は単純には出来ていない。今の福島に接するとき、これを忘れてはいけない。過去は事実であり、そこから学ぶことはあってもそこで立ち止まってはいけない。福島の未来を考えるとき、これを忘れてはいけない。人によって立場は変わるし、考え方も変わるのだから、先の僕の主張は到底受け入れられないものかもしれない。しかし、やはり福島という土地、歴史は災害の教材で終わってほしくない。こんな視点もあるということを知ってもらいたいし、今、そして未来、福島に関わる方は胸を張って、福島を創ってほしい。僕もその一助となれたらうれしい。